

第7章 磐城平城の縄張りとは建築

1 縄張りとは構造

(1) はじめに

磐城平城は、江戸と相馬を結ぶ水戸街道と中通り地方からの岩城街道が交差する交通の要衝^{ようしゅう}に位置し、標高約43mの台地先端部に立地する。国道399号により分断された東側の台地全体が城郭^{じょうかく}となる。台地周囲の低地には侍屋敷や城下町が作られ現在までその町割りや地名が残っている。慶長^{けいちょう}7年(1602)鳥居忠政が入封した。鳥居氏は入封後ただちに築城を開始し、12年を要し竣工^{しゅんこう}したと言われている。築城の概要については第2章のとおりである。本城郭の基本構造は幕末の安藤氏の時代に至るまで創建期^{くわんぱく}の縄張り^{とうしゅう}を踏襲している。本節では、磐城平城の縄張りの特徴とその構成要素について、絵図A(正保年間)・絵図B(延宝8年)・絵図C(元文2～延享4年)・絵図D(寛政元年)をもとに整理し概述する。

(2) 縄張り

① 平山城

縄張り^{なわばり}とは城の基本設計のことである。本丸を中心に二ノ丸、三ノ丸ほかの曲輪^{くるわ}を配し、立地により山城・平城・平山城などに分類される。磐城平城は、「奥州岩城平之城覚書」(史料4)に「平山城 天守無し」と記載される。本城郭が平山城とされるのは、本丸が立地する台地の南側の低地に置かれた田町曲輪を含むためであり、外堀に囲まれた範囲が城郭とされた⁽¹⁾。

② 曲輪

「奥州岩城平之城覚書」および絵図Aによれば、磐城平城は本丸、二ノ丸、三ノ丸のほかに、大手曲輪^{おおてぐるわ}・大手外曲輪^{おおてそとぐるわ}・塩硝曲輪^{えんしょうぐるわ}・水之手曲輪^{みずのてぐるわ}・水之手外曲輪^{みずのてそとぐるわ}・杉平曲輪^{すぎだいらぐるわ}・内記曲輪^{ないきぐるわ}・田町曲輪^{たまちぐるわ}で構成される⁽²⁾。本丸は東西80間・南北85間を測る⁽³⁾。政庁および藩主の生活空間である御殿が建ち南側には庭園も造られていた。二ノ丸は東西30間・南北35間で本丸に比べて狭小である。土地利用の詳細は不明であるが、小さな蔵があり、樹木(栗・柿・杉苗・茶の木)が植えられていたようだ(「万覚書」元禄2年9月1日条)。また、内藤氏時代には塩硝曲輪にあった塩硝蔵^{えんしょうくら}が移築されている。創建期の三ノ丸は、二ノ丸の北側の台地で東西35間・南北40間を測る。利用実態は不明である。なお三ノ丸は17世紀末葉までには杉平曲輪に移転しており、これ以降はこちらを三ノ丸としている。新しい三ノ丸には、元和園^{げんなえん}と呼ばれる巨石を配した広大な庭園や、馬場、若干の建物などがあつたらしい。本丸西側の中門を出ると大手曲輪、さらに大手門を西に出ると大手外曲輪が連なる。大手外曲輪の



図45 安藤氏時代の磐城平城

(鈴木 啓 2002)

さらに西側には、長方形の内記曲輪が連なる。四方を掘り切られた独立した曲輪で、巨大な馬出(出撃拠点)と評価されるものである。この曲輪には上級の侍屋敷があった。本丸の北側出口(揚手)を出ると、塩硝曲輪・水之手曲輪・水之手外曲輪(裏門曲輪)が連なる。塩硝曲輪には黒色火薬を保存する蔵(塩硝蔵)があった。水之手曲輪には細長い白蛇堀があり湧水点を確認できる。田町曲輪は台地の南側の低地にあり外堀と内堀に区画された範囲で、上級の侍屋敷が立ち並んでいた。なお各曲輪の大きさは「奥州岩城平之城覚書」(史料4)を参照されたい。

③ 城 下 町

南西端の長橋町から一町目一五町目を経て東端の鎌田新町に至る本町通りを基準に長方形区画の両側町が形成された。この街区は現在の町割りおよび町名に踏襲されており平町の歴史的形成にとってきわめて重要な意味を持っている。

④ 惣 構 え

城郭と城下町を囲む防御の外郭線である惣構えは内藤氏時代に完成したと考えられる。慶安5年(1652)の文書にある新川の付け替えがそれである(内藤家文書2-5-2「御印判並御意書付之写」)。慶安6年(1653)に新川の掘削をするよう命じている。絵図Cには流路が切り替えられた新川が描かれている。惣構えのエリアは、南側は新川(現在の新川緑地公園)、北側は好間川、東側は夏井川で囲まれた範囲である。惣構えの出入口に築かれる門を「惣門」という。長橋(尼子橋)を渡り城下に入る長橋門は惣門と呼ばれていた。惣構えの南西端にあたる。東は鎌田町と鎌田新町の間に鎌田門があった。西端は梶形門(現在の磐越東線梶形踏切付近)で、門の内側は足軽町となり久保町に続く。

(3) 石 垣

正保期(絵図A)を見ると、城郭の石垣は、大手曲輪の南側と東側の全面・北西の一部の崖面に腰巻状に積まれる。大手外曲輪の黒門の東側は、内堀が東西方向から南北方向に曲がる場所にあたり崩落しやすい場所で、ここに「武者返し(武者落し)」と呼ばれる高さ6間の石垣が積まれた。また大手門梶形、中門(「多門長屋」)、本丸北側の梶形(搦手)にも石垣が見られる。さらに塩硝曲輪と水之手曲輪の間の門の基礎、水之手曲輪から二ノ丸に渡る橋の基礎(「橋台」)にも石垣が見られる。外堀に面した門としては、田町曲輪中央南の不明門の梶形、西側の搔槌小路門の梶形にも石垣が積まれている⁽⁴⁾。

磐城平城の土手は風水害や地震によりしばしば崩落したようで、石垣による補強工事が行われた(田仲 2020、本書コラム1)。延宝期(絵図F)の石垣を見ると、木橋から土橋への変更にともない大手曲輪と大手外曲輪の境の堀を空堀化し外曲輪側の土手も石垣に変更している。また、外曲輪の御米蔵から陸地化した内堀にいったん下りて、外曲輪沿いに三ノ丸方面へ行く道と、城坂に下りる堀底道(「堀ノ内往来ノ道」)が造られるが、この道の両側にも石垣が積まれた。

現在、確認できるのは中門櫓の石垣と本丸北出入口の塗師櫓石垣と梶形内の石垣である。比較的遺存状態のよい塗師櫓石垣の東面を観察すると、直径1m前後の泥岩系の自然石を築石として斫り加工をせず積み上げた野面積みの石垣である。築石の隙間には間詰石が入られる。築石の裏には分厚く栗石が入られていることが、中門櫓の石垣の崩落箇所から推定される。石垣の両端の隅石は、花崗岩を直方体に加工し算木積みになっているが、面取りは甘く矢穴も見られない。これらの特徴を総合的に勘案すると、鳥居氏時代(創建期)の慶長年間の石垣と推定できる。塗師櫓石垣の西面の石垣は積み方が不自然であり後世の積み直しの可能性がある。中門櫓石垣も塗師櫓石垣と同様の工法をとっており創建

期の石垣と推定される。築石の一部崩落部分には分厚い栗石の裏込めが認められる。磐城平城は天然の急崖という立地により、高石垣はそもそも不要であり、本丸・大手曲輪周辺に集中して石垣が築かれた。城下町に面した大手曲輪の南面に腰巻状に石垣を配したのは、磐城平の名物として名高い三階櫓とともに城下に「見せる石垣」としての意味もあったと考えられる。

(4) 堀

① 外堀・内堀

水堀は防御だけでなく湧水の処理や物流のために重要な施設である。磐城平城は、本丸(大手曲輪・水之手曲輪等を含む)を囲む内堀と、二ノ丸・三ノ丸・内記曲輪・田町曲輪を囲む外堀によって構成される。外堀は水路で城下町と連結しており、さらに新川を經由して夏井川、太平洋に繋がっていた。内堀は幅17～26間、深さ3～4間を測り、大手門の前の堀は幅17間、深さ4間半である。外堀は田町曲輪の南側と東側は幅20～24間、杉平曲輪(後の三ノ丸)の北側で10～12間、深さ2間半～4間である。内記曲輪の周囲の堀は幅17～22間、深さは六間門に面した谷で8間半、北側・南側で3～5間である。

② 丹後沢の形成

現在の丹後沢公園の池は、絵図Aを見ると、本丸を^{いぎょう}圍繞する内堀の一部であったことが分かる。絵図Bを見ると、水之手曲輪の二ノ丸門からいったん坂を下り木橋で二ノ丸に渡るようになっていたようだ。ところが、絵図Cではこのあたりが陸地化した表現となっている。寛政元年(1789)の絵図Dでは明確に現在に近い丹後沢が描かれている。これは、大手門の土橋設置による水流の変化(丹後沢側の水位維持の難しさ)、防御性よりも本丸と二ノ丸の移動の利便性を重要視した結果であろう。

(5) 出入口・櫓形・橋

① 出入口・櫓形

城郭の出入口はとくに厳重な防御施設が設けられる。磐城平城の出入口は^{うちますがた}内櫓形となる。櫓形とは侵入してきた敵を狙い撃ちにする構造をいう。大手門・櫓形門・六間門はいずれも櫓門形式の櫓形構造の出入口で格式が高い。内記曲輪から大手外曲輪に入る黒門の内櫓形に櫓はないが、米蔵方面の北門と大手門に至る南門の三門構成となる。なお、大手門の櫓形内と大手曲輪内にはそれぞれ番所が置かれ、とくに厳重な警備が敷かれた。田町曲輪の南正面の不明門、西側の搔槌小路門は石垣造りの内櫓形であり、町方に対して見栄えを意識した重厚な門となっている。

② 橋

曲輪を連携する橋には、木橋と土橋がある。木橋はいざという時に切り落とすことがで



図46 絵図A 正保平城絵図控(絵図1) 正保年間(1644~1648)



図47 絵図B 磐城国平城内修理下絵図(絵図26) 延宝8年(1680)

きる機動的な施設であるが、壊れやすく^{ひんぱん}頻繁な維持管理が必須である。土橋は頑丈で、堀の高低差を調整することができる。創建期の磐城平城では、大手曲輪と大手外曲輪を繋ぐ橋、水之手曲輪と二ノ丸を繋ぐ橋が木橋で、これ以外は土橋であった。大手門の木橋は延宝年間に土橋に改造される(絵図E・F。延宝4年に幕府に申請したもの)が、その際、橋をやや北側に移動させ、枳形も大手曲輪の北西隅に設置した。このため従来、大手門枳形に入ると北に櫓門があったが、南入りに櫓門を造り替えた。こうした一連の工事により大手門前の内堀は丹後沢側と現在の鉄道側に分断され堀切(空堀)となった。

(6) 櫓 ・ 堀

① 櫓

櫓とは厚い壁をもつ^{かわらぶき}瓦葺の建物で、一重(平櫓)・二重・三重の種類がある。二重櫓がもっともポピュラーで二重二階と二重三階がある。三重櫓は関東地方の譜代大名の城郭に多くみられ、天守の代用といわれるもので、将軍の城(江戸城)に遠慮してあえて天守を建築しなかったと言う。磐城平城のシンボルと言われる三階櫓は、もともと三重三階であったが内藤氏時代には二重三階に変更されたようだ⁽⁵⁾。

磐城平城の櫓は次のとおりである。

- ・ア ^{ろうもん}櫓門(門の上に構える)：^{おおももんやぐら}大手門櫓、^{ちゅうもんやぐら}中門櫓、^{くしがたもんやぐら}櫛形門櫓、^{ろっけんもんやぐら}六間門櫓
- ・イ ^{さんかいはやぐら}隅櫓(石垣の隅や屈曲する位置に構える)：^{やつむねやぐら}三階櫓、^{ぬしやぐら}八棟櫓、^{すみずやぐら}塗師櫓、^{すみやぐら}隅囀櫓、^{すみやぐら}隅櫓、^{ゆみやぐら}弥市櫓(塩硝櫓)、^{ややぐら}弓櫓、^{いしびややぐら}矢櫓、^{うまやぐら}石火矢櫓(午の矢倉)
- ・ウ その他の櫓：^{たいこやぐら}太鼓櫓

櫓門の床面積は、安藤氏時代の「陸奥州磐城平城内郭殿中図」(絵図50)によれば、大手(追手)門櫓が8間3尺×3間、中門櫓は9間×4間で多門長屋と組み合う。搦手の櫛形門櫓が4間×2間である。隅櫓では、三階櫓がもっとも大きく7間×5間、次いで隅囀櫓が9間×3間、八棟櫓が5間×4間、塗師櫓・弓櫓が5間×3間、矢櫓が3間×2間である。隅囀櫓と組み合う隅櫓が2間×2間である。弥市櫓は5間×1丈6尺で絵図Aの塩硝櫓の位置にある。塩硝蔵は内藤氏時代のある時期に移築されており(内藤家文書「磐城平城内并諸役所錠鍵帳」)、移築場所は二ノ丸の可能性が高い(史料10)。石火矢櫓は絵図A・Bには平櫓として描かれる(「奥州岩城平之城覚書」の「午の矢倉」)。元禄以降は櫓台のみの表現であり再建されなかったようだ。太鼓櫓(2間×2間)は、絵図Cや絵図Dに描かれている。壁がない開放的な櫓で太鼓が置かれ時報を知らせた。

② 土 堀

磐城平城で特徴的な施設のひとつに土堀がある。各曲輪の周縁に^{しつくいぬ}漆喰塗りの土堀が構築されている。絵図Aを見ると、本丸・二ノ丸・三ノ丸のほか、本丸周辺の曲輪群、内記曲輪の北・南・東、杉平曲輪(のちの三ノ丸)の西・北などに土堀がめぐらされる。これらの堀のすべてに丸や四角の^{ささま}狭間の表現が見られる。「岩城平御城下覚書」(史料17)により、^{てっぽうささま}鉄砲狭間と^{やさま}矢狭間の両方があったことが分かる。ハリネズミのように城郭全体を防御する

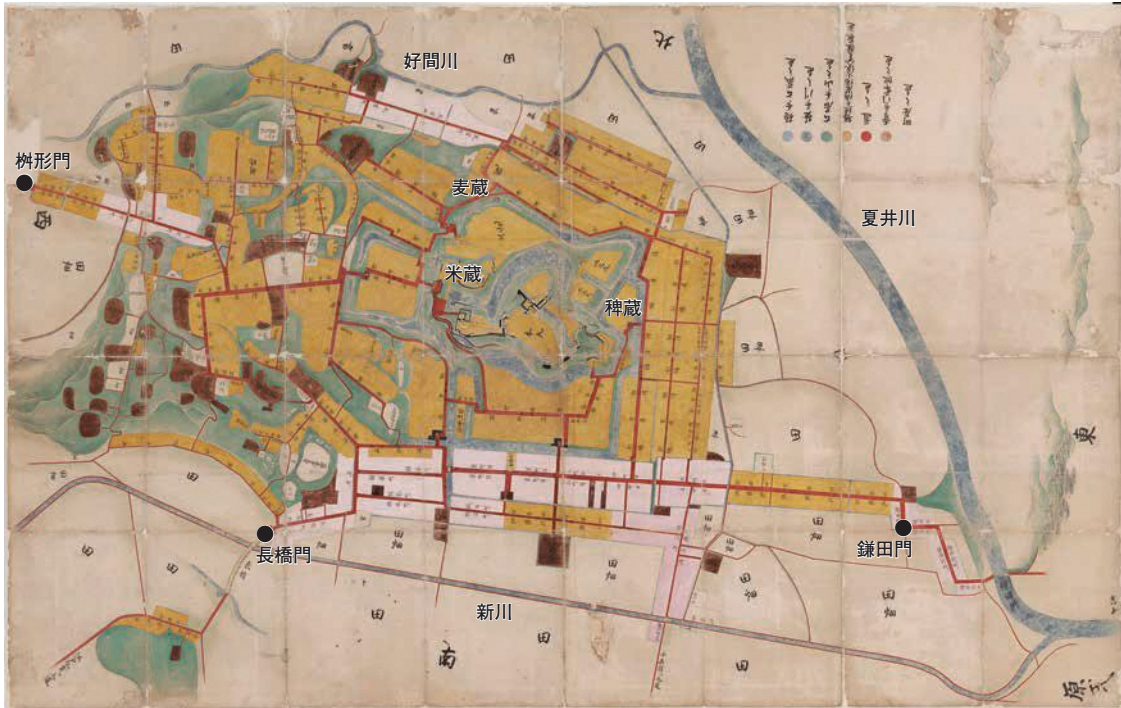


図48 絵図C 磐城平古地図(絵図6) 元文2~延享4年(1737~1747)



図49 絵図D 磐城平城下絵図(岩城平ノ絵図)(絵図13) 寛政元年(1789)



図50 絵図E 大手門(絵図A拡大)

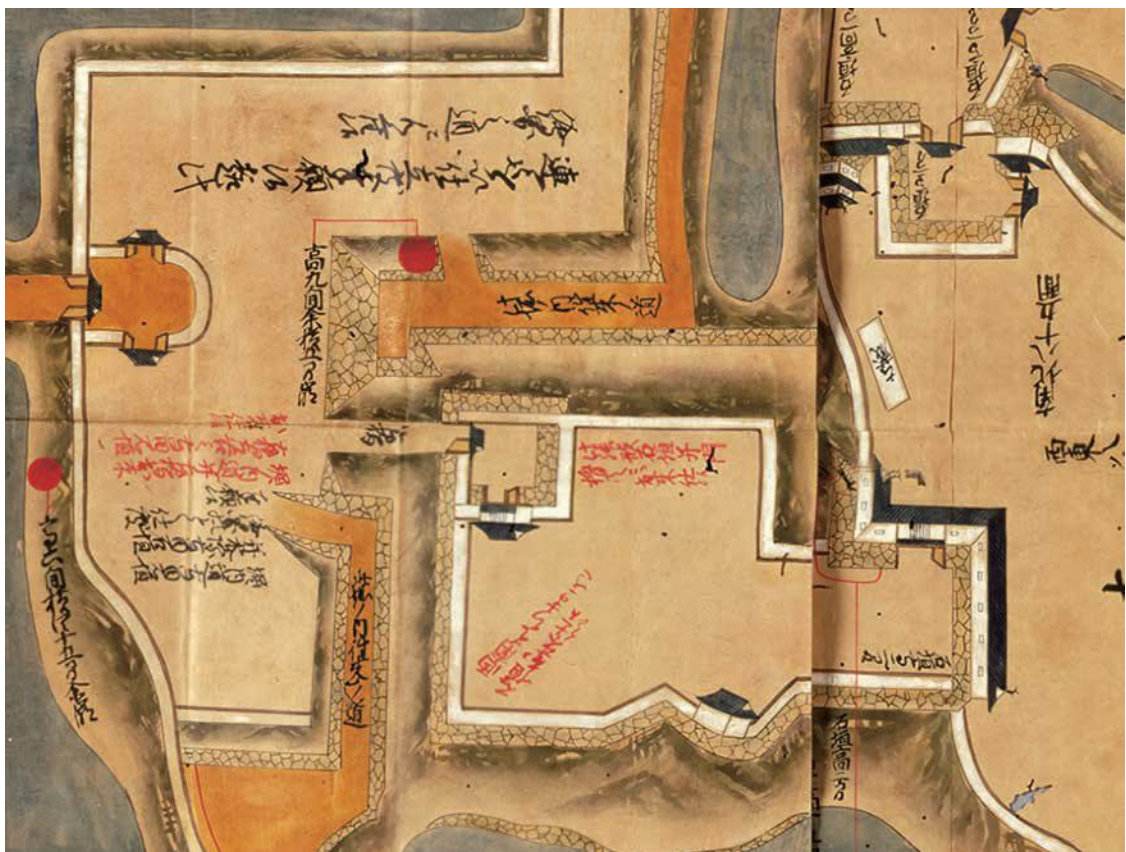


図51 絵図F 大手門(絵図B拡大)

仕掛けとなっていた。さらに、特徴的な工夫としては大手曲輪の南辺の「屏風折れ塀」がある(絵図D)。これは敵に横矢(側射)をかけるための施設で、主に防御の薄い箇所に設置した。近隣では会津若松城に類例がある。石火矢台は築城初期には櫓が建っており、本来この櫓と連携して防御する施設として造られたのであろう。

(7) 蔵

蔵は米蔵・稗蔵・麦蔵・焰硝蔵などがあつた。米蔵は大手外曲輪の北側の一角にあつた。絵図C・Dには5棟描かれている。「御城米」を保管していた。内藤政長が入封の際、幕府の命により3,000石を買い整えたもので、毎年新米と交換しながら備蓄していた(内藤家文書「奥州磐城御城米御勘定帳」)が、幕府へのたびたびの上納のため、正徳3年(1713)には御城米は834石余になっていた⁽⁶⁾。絵図Cによれば、稗蔵は二ノ丸の東側、外堀の内側にあつた。麦蔵は、三ノ丸の北、滝ノ坊坂を下ったところにあつた。焰硝蔵は、黒色火薬の貯蔵庫で、本丸北側の塩硝曲輪にあつたが二ノ丸に移された。これは塩硝曲輪が湿気の多い場所であつたこと、本丸にあまりにも近く延焼の危険があつたことなどが考えられる。

(8) ま と め

以上、絵図と文献をもとに磐城平城の縄張りとし施設の特征について整理した。地形を巧みに利用し綿密に縄張りされていたことがよく分かる。各曲輪は狭間をもつ土塀に囲まれ、それぞれの櫓を連携させ各曲輪が有機的に連動し防御機能を發揮できるように設計された極めて防御性の高い城郭であつたと言えよう。

2 城郭建築

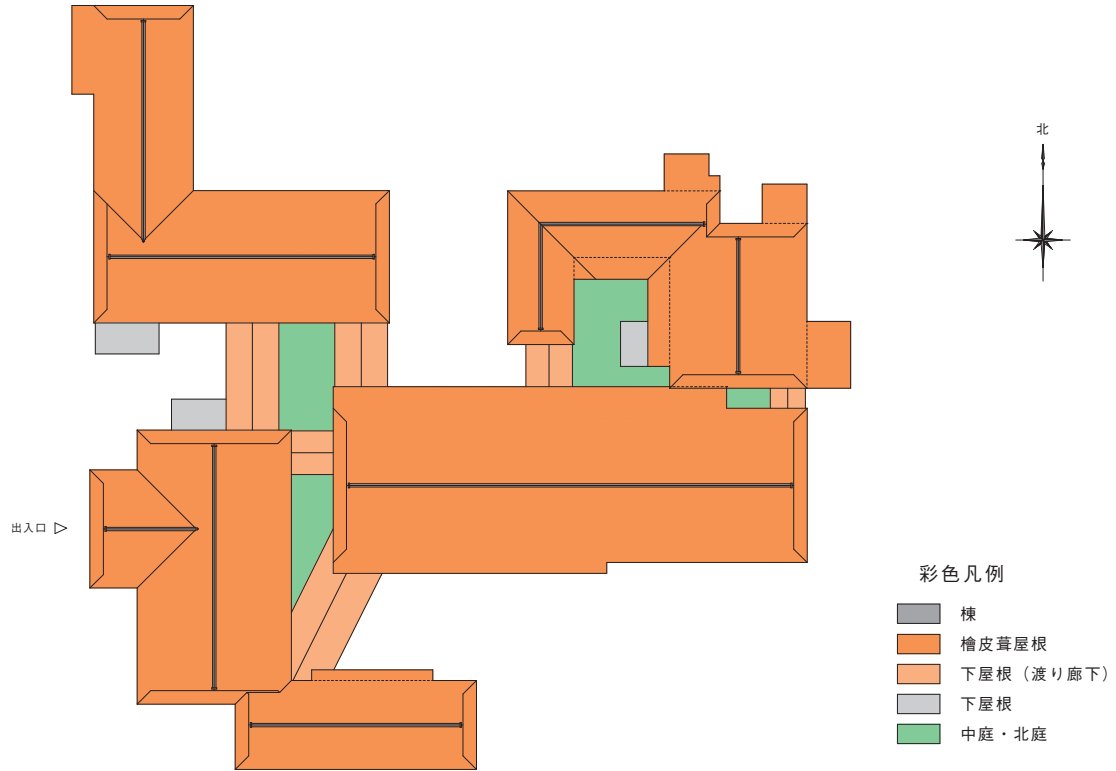
(1) 本丸御殿

本丸御殿は、「磐城平城下絵図(岩城平ノ絵図)」(絵図13)と「陸奥州磐城平城内郭殿中図」(絵図50)に描かれている。

御殿には、「城主の居住」、「役所執務室」、「対面所等儀式」に供される三つの役割があつた。磐城平城本丸の敷地面積は、東西80間・南北85間で6,800坪ほどになる。有力大名では3,000坪ほどの敷地を、中小の大名ではその半分ほどの面積が必要とされたが、本丸の他にも二ノ丸・三ノ丸にも分散配置されるので、平城が手狭だつたとは言えない。

「陸奥州磐城平城内郭殿中図」をもとに平面図を起こすと図52のようになる。京間(六尺五寸)を基本にして、梁間三間の木組み構造で最小単位の厠や湯殿のスペースを手掛かりに大書院や奥御殿、台所などを検証した。数箇所に朱書きされた湯殿や台所は、水回りで腐朽しやすいため改修や場所の変更があつたのだろう。図面作製時の台所は、式台の北側部分で柱等が少ない大スペースで、土間がかまどなどが設置された空間、その離れが奉公人等の部屋である。

式台のある玄関部に入ると、大広間(この図面では30帖)と御次之間(この図面では21帖)



「陸奥州磐城平城内郭殿中図」起こし図の屋根伏図(参考)



「陸奥州磐城平城内郭殿中図」起こし図(参考)
松本庸器作図

図52 本丸御殿の復元図(案)



図53 本丸御殿の位置(推定図)と発掘調査区

となっている。その南側には突き出たふた部屋は、「使用者の間」、「次の間」（各21帖）と離れに茶室、水屋だろう。渡り廊下（当時は「筋違御廊下」と呼ばれた）を渡ると、対面所等儀式の場となる大書院（この図面では42帖）、手前に御次（この図面では24帖ほど）で、東に向かって三之・二之間、小書院へと連なる。その北側が城主の居住する奥御殿となる。その真ん中に、斜め縁が書かれたスペースと小部屋、それが能舞台などとすれば能舞台だけで三間四方が必要なのでいささか狭い。東の離れは仏間か。その間は「御小御座敷」の可能性はある。

奥御殿は豪華な書院造と考えられる。令和2年（2020）度の本丸跡の発掘調査で陶器の戸車が出土した。このような戸車が使われるのは漆喰^{しっくい}を塗った防火用の土戸や頑丈な板戸などである。これらは重量があるので、陶器や堅木^{かたぎ}（カシ・サクラ等）の戸車が使われた。そしてまた敷居の溝にも堅木を埋めたり、鉄板のレールなどが使われた。ここでは、重量のある板戸に使われ、そこには彩り鮮やかな障壁画が描かれていたと考えられる。

この絵図面では、室内と外の区別がはっきりしないこと、かならずあるはずの厠の表記が少ないことが不審である。厠は外部に面すること、中庭の時には外部への通路が存在することが条件となるが、不明な点が多い。さらに外部との間仕切りである雨戸の設置場所などの検証が必要なので、それらの資料が必要である。

なお、室名については、複数の資料を参考に記載したものである。

（2） 櫓

戊辰戦争後の磐城平城の様子が『戊辰私記』^{ぼしんしき}（味岡 1903）に詳しく書かれているので、これを手がかりに調査を行った。そこには矢櫓・太鼓櫓・千貫櫓・焰硝櫓が戊辰戦争前に廃棄されていたと書かれている。その4つの櫓がいつどの様に処分されたかは分からない。中門櫓と八棟櫓は戊辰の役で焼失したとあるので、その焼けた建物は廃棄されたのだろう。堀が埋め立てられているので、その中に廃棄されたのかもしれない。櫓では、六間門櫓・追手門（大手門）櫓・三階櫓・隅図櫓・櫛形門櫓・塗師櫓・弥市櫓・弓櫓が民間に払い下げられたと記録されている。

① 三階櫓

本丸の東側端部に所在する。高層建築である天守や櫓では、様々な破風^{はふ}（入母屋破風^{いりもやはふ}・千鳥破風^{ちどり}・唐破風^{から}・切妻破風^{きりつまはふ}）がたくさん付けられている。それ以前の高層建築と言えば、三重塔や五重塔で屋根に破風はなかった。それだけ新鮮で権威の象徴となった。磐城平城の三階櫓や八棟櫓等も破風の存在は重要である。構造的よりも城下からの見上げた時の印象が大事だったからである。

現在確認されている複数の磐城平城絵図をみると、当初は三重三階の櫓であった。享保年間の「平城下古絵図」にはすでに二重三階に描かれているので、内藤氏時代には二重三階^{かんえい}の三階櫓に変わったと考えられる。寛永12年（1635）の武家諸法度の改定では、新しく城を築くことは禁じているが、堀や石垣が破損した時は幕府に届け出ること、櫓や堀や門については、元の通りに修理することが定められたため、三階櫓の改築として規模を縮小

する減築として二重三階の三階櫓となったとも考えられる。

この様な建物の改築が行われた背景には、過去の大地震の影響も考えられる。記録に見られる地震と領主の異動は次のとおりである(宇佐美 2014)。

慶長7年(1602) 鳥居氏入封

元和8年(1622) 内藤氏入封

延宝5年(1677) 10月9日 M8.0 小名浜、神白、永崎にて溺死80人の記録あり。

宝永7年(1710) 8月22日 M6.5 いわき、城の櫓破損、潰れ9軒。

享保15年(1730) 10月2日 M7.3 常陸沖

塩硝櫓は内藤時代に二ノ丸へ移り塩硝蔵となるらしい。

延享4年(1747) 井上氏入封

宝暦6年(1756) 安藤氏入封

寛政5年(1793) 1月7日 M8.0～8.4 寛政地震(連動型宮城県沖地震)

天保6年(1835) 6月25日 M7.0 宮城県沖地震 死者多数、仙台城損壊、津波あり。

文久元年(1861) 9月18日 M6.4又はM7.2 宮城県沖地震 陸前、陸中、磐城 仙台城破損、懐家、死傷あり、陸前で被害が多かった。

三階櫓については、安藤氏時代の「岩城平御城下覚書」(史料17)に寸法や基礎となる石垣等の記載がある。

三階櫓 高 四丈三尺一寸(43.1尺=13.059m)棟より石口まで

上ノ重 長 六尺五寸間三間方(6.5尺×3=19.5尺=5.908m 縦横)

高 壹丈九尺六寸五分(19.65尺=5.954m)

窓 十式 四方有

中ノ重 横 六尺五寸間三間(6.5尺×3=19.5尺=5.908m)

長 同 四間(6.5尺×4=26尺=7.878m)

高 壹丈壹尺貳寸五分(11.15尺=3.378m)

窓 三 南ノ方

下ノ重 横 六尺五寸間 五間(6.5尺×5=32.5尺=9.847m)

長 同 七間(6.5尺×7=45.5尺=13.786m)

高 九尺八寸(2.969m)、内縁下貳尺四寸(0.727m)

窓 東ノ方五 南ノ方貳 西ノ方七 北ノ方貳

入口 北ノ方、東ノ方

鱈^{しゃち} 貳ツ

矢狭間表二七ツ

石垣 四方櫓道切廻

高 貳尺八寸(0.848m)

石雁木北ノ方十一段 東ノ方十段

三階櫓ヨリ八棟櫓迄外堀 長三十四間

鉄砲狭間 十七

矢狭間 十七

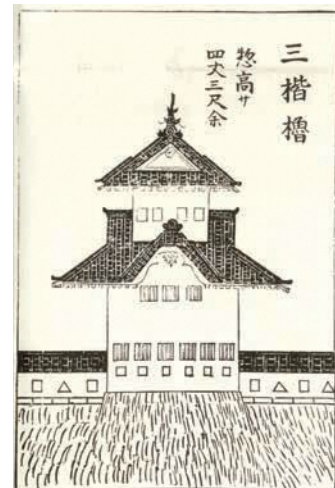


図54 三階櫓

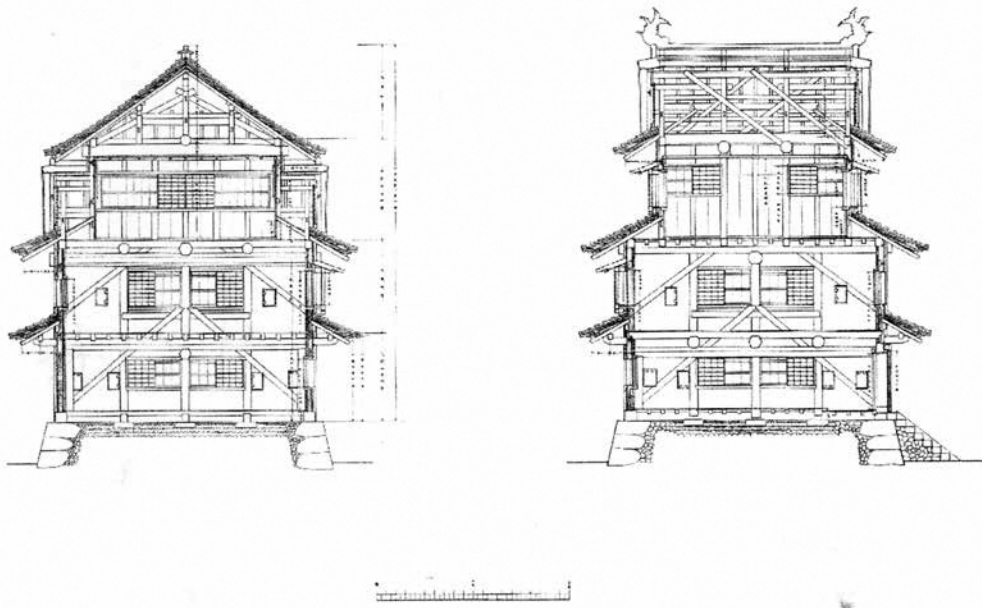


図55 弘前城辰巳櫓断面図 『昭和16年維持修理報告書』より

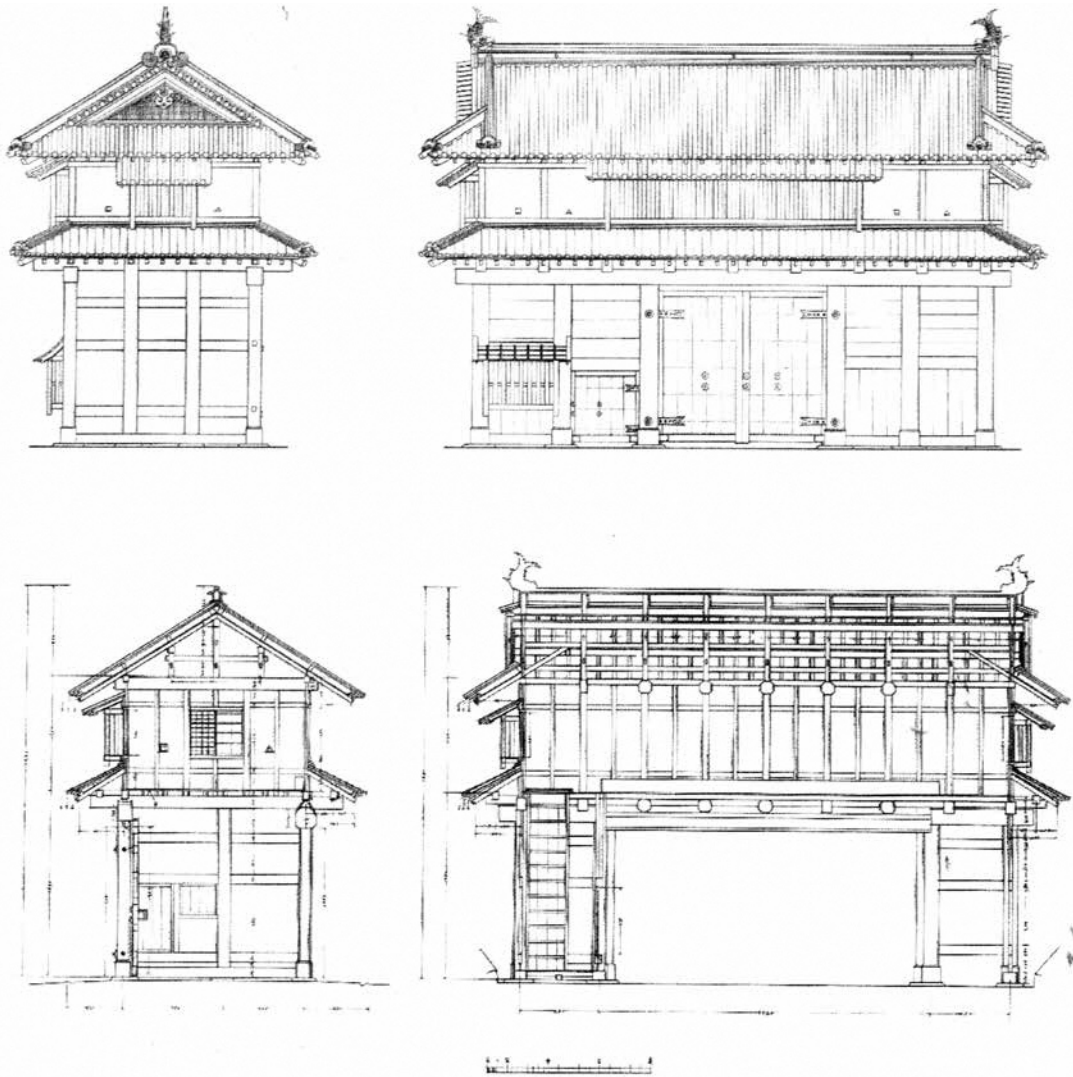


図56 弘前城追手門立面図・断面図 『昭和16年維持修理報告書』より

寸法の標記は「横・長・高」に分けて記載される。横は「梁間方向」、長は「桁行方向」、高は高さと考えられる。

軸組は、柱の上に梁を掛けその上に桁を載せる方法「折置組」である。現在使われている、柱の上に桁を置いてその上に小屋梁を組んでゆく方法「京呂組」とは異なる。城郭建築は大断面の木材が使用されるので、強固な組み方となる「折置組」を採用している。この軸組は高度な技術を要するものである。

寸法標記の六尺五寸間は、当時の一間を表していると考えられる（現在の京間にあたる）。この寸法での室内空間は、武家社会での衣装（衣冠東帯や刀をさす等）や所作などから、必要な間取り寸法だったと考えられる。

現存する16～17世紀前葉の城郭建築の一間の基準寸法は次のとおりである。

- ・丸岡城天守(重文)：六尺三寸二分 天正4年(1576)築城
- ・犬山城天守(国宝)：六尺二寸五分 建築年は諸説あるが、現在では天正年間説が有力
- ・彦根城天守(国宝)：六尺五寸三分 慶長11年(1606)年に大工棟梁浜野喜兵衛により大津城の天守を移し格好良く仕直したものとされる
- ・姫路城天守(国宝)：六尺五寸三分 8年をかけ慶長13年(1608)に完成
- ・大阪城千貫櫓(重文)：六尺五寸 寛永7年(1630)頃に完成
- ・弘前城二ノ丸辰巳櫓(重文)：六尺五寸 慶長16年(1611)

以上の例の中で、基準寸法の二分や三分の半端な寸法が使われているのは、曲尺の誤差(伸び)、つまり現尺より若干の伸びがあったことが原因と考えられる。享保年間(1716～1735)に「享保尺」に統一され、現在の曲尺とほぼ同じ長さとなり近世規矩術の発展と共に全国に普及した。

② 八棟櫓

本丸の東側端部に所在する。「岩城平御城下覚書」(史料17)による八棟櫓各部位の法量は次のとおりである。

八棟櫓	高	三丈四尺三寸三分 (34.33尺 = 10.402m)
上ノ重	横	七尺五寸間二間 (7.5尺 × 2 = 15尺 = 4.545m)
	長	六尺五寸間三間 (6.5尺 × 3 = 19.5尺 = 5.908m)
	高	壹丈四尺七寸五分 (14.75尺 = 4.469m)
	窓	南ノ方三 東ノ方式 西ノ方式 北ノ方式
下ノ重	横	七尺五寸間貳間 (7.5尺 × 2 = 15尺 = 4.545m)
		六尺五寸間貳間 (6.5尺 × 2 = 13尺 = 3.939m)
		ノ四間 (28尺 = 8.484m)
	長	同 五間 (6.5尺 × 5 = 32.5尺 = 9.847m)
	高	壹丈七尺八分 (17.8尺 = 5.393m)
		内縁下貳尺五寸
	窓	東ノ方三 南ノ方五 西ノ方壹
	入口	北ノ方



図57 八棟櫓

石雁木十三段

鯨式ッ

矢狭間四ッ

『戊辰私記』には、八棟櫓の南・西面で4つの棟が描かれており東・北面で7つの棟を確認できる。北側に入口があるので、唐破風か入母屋の屋根が付加されていれば、合計で8つの棟となる。この八棟櫓は戊辰戦争で焼失した。

③ その他の櫓

- ・ 矢 櫓 弓矢を格納しておく櫓。文化7年(1810)絵図で消失の記述がある。
- ・ 太 鼓 櫓 高壺丈六尺(16尺 4.848m)。太鼓櫓は必要不可欠で、どの城にもあった。通常は二重櫓で、その二階に太鼓が吊り下げてあった。文化7年絵図で消失の記述がある。太鼓は時報であって、夜明けと日没の時刻を知らせ、城門の開閉の合図となった。
- ・ 焰 硝 櫓 鉄砲を撃つための弾薬庫。内藤時代には塩硝曲輪にあった焰硝蔵が移築、二ノ丸に移転した。
- ・ 中 門 櫓 惣高貳丈五尺餘(25尺)(7.575m)大手曲輪から本丸に入る入口の門である。
- ・ 六間門櫓 桁行間口六間の櫓門
- ・ 追手門(大手門)櫓 惣高サ壺丈七尺余(17尺)(5.151m)城の表口である大手曲輪のもとも外側に建つ城門で城の表門の櫓である。
- ・ 冠木門(7) 横八尺六寸(2.606m) 長壺丈四尺五寸(4.393m) 高壺丈九尺(5.757m) 左右堀長七尺五寸 鉄砲狭間左右壺
同堀下 石雁木左右七段 高同七尺(2.121m) 一段=一尺
- ・ 隅 図 櫓 隅にある櫓で普通は隅櫓と言われるが、櫛形門、塗師櫓、櫛形櫓等と搦手の枳形を形成しているので、「図」の字が挿入されている。本丸の守りを固める堅固な造りである。
- ・ 櫛形門櫓(櫛形冠木門) 櫛形門の扉に櫛形の窓が付けられていたか、又は欄間部分に櫛形欄間が付いていた事による名称であろうか。
- ・ 塗 師 櫓 漆細工や漆器の製造に従事する職人の作業場とされたことによる名称か。矢櫓のそばに塗師小屋があったが、「陸奥州磐城平城内郭殿中図」(文化7年)には記載されていない。その後に塗師櫓に機能が移って櫓の名称となったのかもしれない。
- ・ 弥 市 櫓 弥市のいわれは分からない。「陸奥州磐城平城内郭殿中図」(文化7年)には記載されていない。『戊辰私記』には存在している。
- ・ 弓 櫓 弓矢を格納しておく櫓
高二十一尺一寸二分(6.399m) 内縁下二尺(0.606m)
横六尺一寸七分(1.869m)
長六尺五寸(1.969m)、五間
窓北ノ方壺 東ノ方壺 入口南ノ方 石雁木三段

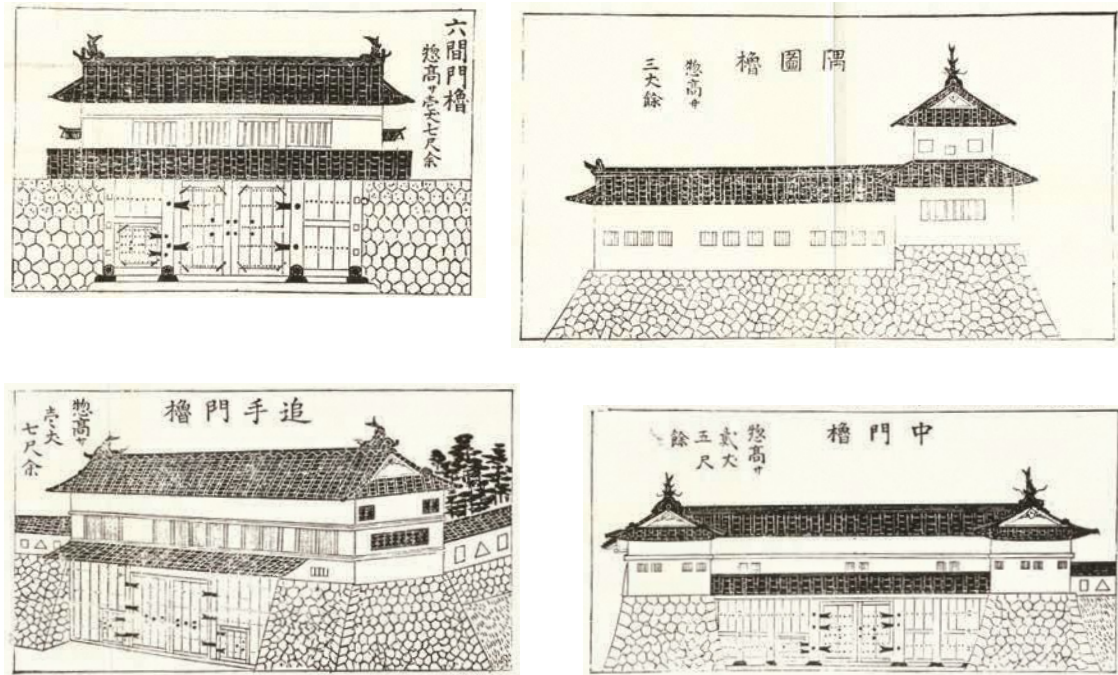


図58 その他の櫓

以上が、『戊辰私記』に書かれている櫓である。

(3) 城門（現存遺構）

『戊辰私記』によれば、城門遺構のうち、黒門・裏門・中仕切門・埋門・外張門・内張門・杉平門・玉ノ門・城坂門・田町門・搔(オ)榎門・不明門・鷲ノ門・その他の小門が払い下げられたと記録されている。

これらの中で、①の搔(オ)榎門だけが現存遺構と名称が一致するものである。この門の本体部分は、ほぼ当時のまま残っているとみられる。②の長橋門の記載はないが、城外の建物なので記載しなかったのだろう。③の性源寺山門と⑥の賢沼寺山門は、どちらも「裏門」と言われているが、絵図等に記載されている「裏門」なのかどうかは判断が難しい。賢沼寺山門は、寛文・延宝(1661～1680)の頃、平藩主内藤氏が城の裏門を寄進したと伝えられる(柳沼 1975)。

現在確認されている門について、伝承されたものも含めて次に紹介する。

① 搔(オ)榎門

この門は明治4年(1871)の廃藩置県後の城片付で、平藩主安藤氏の金子御用建を勤めた茗荷屋馬目惣助が縁故払い下げを受け、妹の嫁ぎ先の平藤間の青木家に贈ったという高麗門である。

門の構造は、親柱を厚平柱(342mm×170mm)(長方形断面を平使い)とし、冠木(264mm×130mm)と呼ばれる横架材を平に組む、冠木の下には大きな楣(普通、鼠走という)(288mm×110mm)が入り、後に藁座が左右に取り付き両開きの板扉がある。一間一戸の高麗門である。親柱の上部は冠木の上に「173mm×142mm」の柱に造り出しで延びている、それに棟木を乗せ、柱



図59 搔(才)槌門

間は縦格子の欄間とし、その造り出し柱に持ち送り状の腕木(242mm×50mm)を挿し、前後に桁を乗せ棧瓦葺の切妻屋根を支える。控柱(150×150)を4尺5寸間に建て控柱上に冠木を乗せ、その冠木を親柱には柄差、控柱上部は親柱同様に造り出し柱とし棟木を乗せる。親柱近くに束柱を建て棟木を受ける。こちらも同様に、腕木で桁を受け棧瓦葺の切妻屋根を支える。

なお、脇潜戸(鼠戸)が右側に配置されている。そして左側柱上の冠木の木口が切り詰められた痕跡が分かり、右側と長さを揃えたことが分かる。よって移築前は左側に石垣か別の建物との兼合いが考えられる。構造は扉も含め、檜材で造られている。部材の風化度合いは少ないことから移築時は比較的新しい門であったと考えられる。

扉には、戊辰戦争の爪痕の弾痕が残っている。

② 長橋門

長橋門は、藩主安藤信正(弘化4年〔1847〕～文久2年〔1862〕)の命を受けて柏原庄五郎が造営し藩に献納したものである。

戊辰戦争後、柏原氏に縁故払い下げられ、新川を利用して平字新川町の柏原家に運んだ。庄五郎の養子柏原新八郎は後に実家の高野姓を名乗り、高野氏の住居の一部として利用されていた。その後、平成20年1月に高野氏からいわき市に寄贈された。

門の概要は、桁行3間(1間6.3尺)、梁間2間(1間4.5尺)、扉柱間10.8尺である。



図60 長橋門



図61 性源寺山門

③ 性源寺山門

平城下の南西部、長橋門より城下に入ると曹洞宗^{そうとうしゅう}の性源寺^{しょうげんじ}（平字長橋町）の山門がある。明治3年（1867）に火災で焼失した際に、山崎家（屋号『塩屋』）が磐城平城の裏門であったものを移築寄進したと言われている。

丸に洲浜^{すはま}の紋と日連子^{ひれんじ}の紋（寄進者山崎家の家紋^{けやき}）が檜材木彫で飾られている。

門の構造は親柱（318mm×258mm平使い）に冠木（382mm×314mm縦使い）を9尺間口に載せ、控柱（197mm角）にも冠木を載せ、先端を木鼻とした3本の梁で奥行7尺5寸（2273mm）間に繋ぎ、中央に芯束^{たるき}をたて棟木を載せ、化粧垂木^{ひのき}を1尺間に入れ棧瓦葺切妻屋根とする。

梁以下は当初材で板扉も含め総檜材^{ひのき}と思われ、部材の風化度から300年ほど経過していると考えられる。

④ 佐原家門

いわき市鹿島町御代の元造り酒屋の佐原酒造店の門扉が磐城平城の門の遺構であると言われる（柳沼 1975）。

門は、大幅に改修されており元の状態が分からないが、門扉と親柱が城門の遺構と思われる。

厚平柱の親柱（318mm×236mm）と檜1枚板の鏡板^{かがみいた}（左右同板、木目が対称）とした板唐戸だけが当初の遺構で、後に門をトラックが通れるように扉の縦框^{たてかまち}に16cm幅の框を両扉に付加



図62 佐原家門

して門の内法を32cmほど広げた。つまり、柱上部の冠木や楣まぐさは後補のものである。現状は控柱のある、性源寺山門の形式で建てられているが、親柱に残る痕跡からは、薬医門やくいや高麗門の可能性は低く、櫓の門の可能性が高い。

⑤ 八代家門

いわき市鹿島町御代の八代家の門は長屋門であるが、入り口の親柱、虹梁こうりょう、欄間彫刻らんまそして門扉かど(現在の門扉は作り替えられている)が磐城平城の遺構と言われている。

建築概要としては、檜の厚平柱の親柱(318mm×179mm)に虹梁(300mm×196mm)(袖切り絵様若葉に下端眉あり)、親柱両外側に袖切り虹梁がつく。これらが長屋門の入り口部に取り入れられている。長屋門全体の中で、この入り口部分だけが統一が取れず外部からの装入であるように見える。佐原家門と同様の使われ方で磐城平城の遺構の可能性は高いと思われる。

⑥ 賢沼寺山門

いわき市平沼ノ内の密蔵院賢沼寺みつぞういんけんしょうじの山門は、内藤氏の時代に磐城平城の裏門を移築寄進されたと言われている。平成23年(2011)、東日本大震災で倒壊してしまった。

四脚門、切妻造、銅板葺であった。妻飾りが虹梁、大瓶束、笈形で飾ってあった。性源



図63 八代家門



図64 賢沼寺山門

(『北海道・東北 城門』 近藤馨 1995) を引用

寺の山門と比べると、賢沼寺の山門は四脚門で格式が上位で、妻飾りのある上品な門である。

⑦ 大和田家門

いわき市平中塩の夏井川沿いに位置する、江戸時代の豪農の家の門である。藩主安藤氏を利用した休憩所標示書が残される屋敷の表門ということで調査をした。門の屋根に鯢しやちが乗っていた。親柱上柄に安藤家家臣の名前が書かれている。当初材は、親柱、冠木、桁梁、門扉だが、佐原家や八代家と同様に改装されている。改修が多いため指定文化財とはならなかった。口伝は無いが、明治の払下げ門とも考えられる建築物である。



図65 大和田家門

- 註 (1) 本稿で使用する城郭関連の用語は、史料での用例や近年の城郭研究を参考に、天守閣ではなく天守、虎口ではなく出入口、郭ではなく曲輪に統一した。
- (2) 曲輪の名称は正保絵図によるが、時期によって曲輪の名称に次のような異同がある。
内記曲輪＝外記曲輪、水之手外曲輪＝裏門郭（曲輪）
なお、安藤氏時代の「磐城平城内郭殿中図」や『戊辰私記』（味岡 1903）には「追手門」の標記が見られるが、これ以前の絵図等はすべて「大手門」と標記されるので本稿では「大手門曲輪」の名称を使用する。
- (3) 1間の長さは、いわき地方ではおおむね18世紀以降6尺（約182cm）で統一されるが、17世紀代の1間は6.3～6.5尺と一定しないため、メートル標記ではなく間面標記とした。
- (4) 外堀に面した東側の鷲門（番匠町方面）は石垣造りではない。
- (5) 「平城下古絵図」（享保20年頃）と絵図D（寛政年間）はいずれも二重三階櫓である（第6章2参照）。建て替えの時期は内藤氏時代の末期ではないかと考えられる。
- (6) 地図Cによれば、5棟のうち御用米蔵が2棟、土蔵が3棟となっている。米以外にも大豆等も収納していたようだ（諸根 1927）。
- (7) 冠木門とは、現在では据立ての二本の親柱の上部に貫（冠木）を通しこれに扉を付けたのだが、ここで言う冠木門は、大手門のような間口の広い大断面の柱を据え、その上に大断面の横木（これが冠木）を組み屋根をかければ大手門で、二階を作れば大手門櫓となる。

参考文献

- 味岡 禮質 1903 『戊辰私記』
諸根 樟一 1927 『磐城文化史』清光堂書店
いわき市 1972 『いわき市史 近世資料』第9巻 いわき市史編さん委員会
柳沼 徳実 1975 『平の文化財』平の文化財刊行会
いわき市 1977 『いわき市史 文化』第6巻 いわき市史編さん委員会
近藤 薫 1995 『北海道・東北 城門』
宇佐美龍夫 2014 『大地震』吉川弘文館
田仲 桂 2020 「内藤氏時代の磐城平城について」『Museum Eyes』vol.75 明治大学博物館